

平成 27 年度 第 3 回文京区協働推進委員会担い手創出プロジェクト支援本部 要点記録

日 時：平成 28 年 3 月 24 日（木） 午前 9 時～12 時 00 分
場 所：シビックセンター12 階 地域振興会議室

<会議次第>

- 1 開会
- 2 支援プロジェクトの継続審査等について
- 3 プレゼンテーション及び質疑について
- 4 プロジェクトの審査について
- 5 平成 27 年度 新たな公共プロジェクト実施状況について
- 6 平成 28 年度 新たな公共プロジェクト実施スケジュール（案）について
- 7 新たな公共プロジェクト成果検証会議の開催状況について
- 8 その他
- 9 閉会

<出席者（名簿順）>

八木 茂 本部長（区民部長）、安藤 哲也 本部長、各務 茂夫 本部長、菊地 端夫 本部長、
丁 寧 本部長、古矢 昭夫 本部長（区民課長）、阿部 英幸 本部長（協働推進担当課長）

【関係課】

榎戸 研 防災課長、福澤 正人 経済課長、熱田 直道 観光・国際担当課長 兼務 オリンピ
ック・パラリンピック推進担当課長

【事務局等】 区民課主査（1）、調査統計係長（1）、区民課主任主事（1）、パートナー
事業者（株式会社エンパブリック）（2）

<議 論（要点）>

1 開会

八木区民部長：開会あいさつ

阿部協働推進担当課長：出席状況と資料について説明。井上本部長は欠席。

2 プロジェクトの選考方法について

阿部協働推進担当課長：資料第 5 号に基づき、対象団体について説明。

3 団体についての終了審査を実施する。審査は、1 団体当たり、プレゼンテーション 10
分、質疑応答 20 分、合わせて 30 分で進めていく。

3 プレゼンテーション及び質疑について

<プレゼンテーション 1 >

プロジェクト名：まちのキャッチフレーズ、創って使い倒してずっとつながるプロジェク
ト

団体：文京かるた隊

<質疑>

各務本部長：かるたを作るプロセス、ファシリテーターが入り遊ぶプロセス、地域や様々

な組織との連携、実際の場面でどう機能するのかを目に浮かぶような形で教えていただきたい。

また、今後事業を継続するに当たり、どのように収入を得て、事業を持続的に実施していくのか。

プレゼン団体：かるたライターは、かるたづくりを担う。地域の様々なコミュニティの情報を収集して、地域のコミュニティ団体と価値を共有しながら、かるたに表現していくのがかるたライターの役割である。そして、かるたファシリテーターは、イベントでそのかるたの内容を生かした形で、例えば高齢者施設であれば高齢者向けに昭和の昔話りに活用したり、小中学校であれば地域の学習に活用していく。同じかるた、同じ句で多世代が様々な切り口で使うことができるよう、学びながら組織的にイベントを実施していくのが、かるたファシリテーターの役割である。

二段階に分かれているので、その両方を同じ方が担うこともある。仲間が少しずつ増えていく中で、かるたファシリテーターが、かるたライターになることもある。

各務本部長：小中学校で、既に実施しているのか。

プレゼン団体：b-caruta の完成版では実施していない。来年度に向けて、竹早などに申し入れをしている。

各務本部長：資金的にはどのような状況か。

プレゼン団体：まずは、かるたの質を高めた上で、かるたを地道に一つひとつ売ることからやっていきたい。また、かるたの作成に当たり、その印刷に対する費用については、クラウドファンディングの手法を活用したいと考えている。しかし、まだ時期早々ということもあり、実施には至っていない。

八木本部長：かるた自体は、いつ頃完成する予定か。絵札や読札の情報が集まってから印刷することになると思うが、まずはその前段の情報がいつ頃までに集まる予定なのか。

プレゼン団体：作り上げるのに夏いっぱいかかると考えている。まずは、来年の正月に合わせて遊びができるようにしたい。そのため、年内には完成できるようにしたい。

八木本部長：仲間の方が増えたとのことだが、何人くらいの賛同者を得られたのか。

プレゼン団体：かるたライターとして、プラス4名の賛同者を得られた。

八木本部長：かるた隊として、現在のメンバーは何名くらいか。

プレゼン団体：10名くらいである。

少し付け加えると、かるたを売り物として印刷する前に、神保町にある奥野かるた店というかるた専門店で、無地のかるたが販売されているので、それにパソコンで印刷したラベリングを貼り付けることで、10組程度のかるたを簡単に作ることができる。そのかるたを使い、夏ぐらいにイベントを実施できればと考えている。

菊地本部長：これまでのかるたを中心とした活動から、かるたを媒体とした活動へと、大きく変更したという印象を受ける。支援による成果と感じている。また、かるたを作る方と利用する方がいる。今、学校にアプローチしているということだが、例えば文京区

には、地方出身者のための学生寮や県の学生会館などがある。また、これから日本で勉強するために海外から文京区にくる学生のための寮などもある。この4月には、多くの学生が文京区に転入してくるので、かるたを通じて日本語の学習や文京区を知るという活用の仕方でもできるのではないかと提案する。

プレゼン団体：ありがとうございます。是非、考えていく。

熱田観光・国際担当課長：将来的には、かるたを子供向けとか高齢者向けとか複数バージョンを作成していくのか。

プレゼン団体：基本的には一つで、高齢者向けには大判のものを作るイメージで考えている。ただ、かるたの取材を続けていくと数が増えていくので、先ほど言ったようなパソコンで印刷したラベリングを貼り付ける方法で、様々なバージョンのかるたが増えていくと思う。本格的なかるたと手作りのかるたのバランスが今後の課題と思っている。

熱田観光・国際担当課長：来年の正月に向けて、引き続きかるた作りをしていくと思うが、販売するに当たり、様々なハードルがある。取材をしているということは、例えば施設であれば所有者や管理者の方に取材をしているのか。つまり、これから販売するのであれば、所有者や管理者の承諾が必要になる。気をつけないと、後でトラブルになる。その辺りは、どう考えているのか。

プレゼン団体：今は、口頭ベースで了解をいただいている。

熱田観光・国際担当課長：販売するとなると、その辺りを慎重に進めたほうがいい。他に、販路ということで、例えば1階のインフォメーションセンターで販売するというようなことも考えられるので、少しずつ実績を積み上げて、やがては広く様々なところで販売できるようになればいい。そのためには、それなりのクオリティのものを作り上げなければいけない。今後も、しっかりと活動を継続していただきたい。例えば1階のインフォメーションセンターで販売したいと考えたときに、あくまでも別団体になるため、私から「できる・できない」とは言えないが、顔つなぎはできる。いいものができ上がったならご相談いただきたい。

プレゼン団体：4月17日開催予定のかるたフェスタの時には、経験のある皆様にも見ってもらうことになるので、文京区のかるたとして様々なアドバイスをいただける。そういったことも活用して質の向上を図っていく。

古矢本部長：かるたを自分たちで使うのであればいいが、例えば販売目的で大量に作るとなると著作権や著作権などの問題がでてくる。それについては、どのように気をつけていくのか。

プレゼン団体：基本的には参考資料があり、リストを作って管理している。リスト以外の自分達がライティングした部分については、我々に著作権があると考えている。それから絵や写真を使っている部分は、アプリを使って加工するというやり方をしている。文京区の建築会の絵葉書大賞の絵を使うということは例外だが、その他の基本的なものに関しては、水彩画加工ができるアプリを使って、元のものがかなり変わった形になる

ような絵を使うことを考えている。それをスタートラインにして、今後、版を重ねていく予定でいる。

古矢本部員：でき上がった後でクレームになると、せっかく頑張ってきたことが無になってしまう。それについては、十分に気を付けていただきたい。

プレゼン団体：わかりました。ありがとうございます。

各務本部員：かるた作りのプロセスと、かるたライターの詳細確認ですが、かるた作りのプロセスを素人的な発想で言えば、ある種お題のようなものがあって、それについて大きいビジョンがあり、区民がかるた作りに関わったり、そこに競争のメカニズムが働いたり、遊び心が手伝ったりといった、かるたが持つ完結的なものがあり、そこに小中学校が関わるプロセスに適合性があると感じる。そもそもかるた作りとは、どのような可能性があるのか。

プレゼン団体：一般的には、公募により川柳のような五七五で読札を作り、コンテスト形式で選出する。我々の場合は、コミュニティの方たちと一緒に作っていくという枠組みを考えている。こういう言葉を使いたいとか、様々な価値を思い返したりすることができるのが b-caruta の特徴になる。

また、駒込であれば『駒込は 一富士 二鷹 三なすび』、本郷であれば『かねやすまでは江戸のうち』という言葉がある。そういった多くの方が共有している言葉も使っていきたい。他にも、様々なパターンのかるたが考えられるが、基本的には今活動している代表的な団体と一緒に考えながら、価値を確認していくという方法で作成していく。それをベースに詳細な情報をカルタの中に書き表し、さらに取材した団体の情報などをサイトなどで紹介していくというパターンも考えている。

<プレゼンテーション2>

プロジェクト名：ぶんきょう・いんぐれす

団体：ぶんきょう・いんぐれす

<質疑>

各務本部員：インGRESを通して、20代、30代の方とイベントを実施し、地域コミュニティの情勢がどのように変化していったのか。

プレゼン団体：我々が取組んだのは、区からの支援を受けているということもあり、プレイヤー同士だけのイベントに終始せず、地域の方も巻き込みながら、インGRESをプレイしていない方も楽しめるようなイベントを企画し実施してきた。

インGRESイベントにおいては、10月から約半年間、毎月第4日曜日にイベントを開催し、回を重ねるごとにリピーターが増えてきた。

今後、「Pokemon GO (ポケモンGO)」というゲームが始まる。これは任天堂とインGRESが共同開発しており、インGRESと同じようにポータルを利用して、親子で歩けるゲームが今年の6月頃から始まる。そうすると、さらに人気が出て、非常に盛んになることが予想される。

菊地本部長：HP を拝見したが、写真の使い方が上手で楽しい雰囲気が伝わってくる。

文京区内の点と点をつなぐような人の流れを生み出すことを、商店街連合会と一緒に進めてきたと思うが、地域のマッピングツールとしてインGRESを活用し、どのように利便性や魅力を向上させて次につなげていくのか。例えば、B-ぐるの活用なども、マッピングツールとして有効で、将来的には連携できるのではないかな。

なお、HP を見ると、女性の参加者も多いようであるが、女性のプレイヤーがいることで、ぶんきょう・いんぐれすのイメージも変わる。

プレゼン団体：商店街と B-ぐるに関しては、昨年 11 月に B-ぐるを使ったミッションが二つできている。利用者が現在 200 人近くいる。ポータルをチェック状況やミッションの結果をみると、B-ぐるを使った「バスGRES」として活動しているグループもいるようである。

また、観光担当が作成しているウォーキングマップもミッションコースと重なっているので、文京区の観光名所を自然にアピールしていけるのではないかなと思っている。

古矢本部長：スマホに関しては「歩きスマホはやめましょう！」と言われているが、そのことについてどのようなことに気をつけているのか。

プレゼン団体：実際に画面を操作する時は、立ち止まって操作するのが基本になっている。しかし、歩きながらプレイする方も中にはいる。ただ、インGRESプレイヤーに限らず、歩きスマホをしている方がたくさんいる。全体として、注意喚起をどのように行っていくかが課題である。我々ができることとして「必ず立ち止まってやりましょう、歩きスマホはやめましょう」と声かけをしている。

熱田観光・国際担当課長：地域の方に受け入れられることが非常に重要である。歩きスマホについては、「歩きスマホをしているのが、インGRESの方だ。」というように見られないように、注意喚起等をしていただきたい。

他に、様々なところでイベントを実施しているようだが、ポータルにした観光スポットはどのようなところか。

プレゼン団体：我々がイベントの拠点にしている江戸川橋地蔵通りや護国寺は、ポータルが密集しており、元々インGRESのプレイスポットになっている。

江戸川橋のイベントでは、椿山荘の庭園の景色がよくインGRESをゆっくり楽しめた。今週の日曜日に行くのは、新江戸川橋公園で、お花見インGRESとしてお花見を皆でしようと思っている。カテドラル教会へも行った。ちょうどミサをやっていて、パイプオルガンを聴きながら、いつもと違う非日常的な体験をした。

熱田観光・国際担当課長：江戸川橋、護国寺周辺は、すばらしい施設がたくさんあり、区としても盛り上げていく取組みを始めている。松声閣もリニューアルされて、いいところなので活用していただきたい。また、少しずつエリアを区内全域に広げて、人の流れを作っていただきたい。

各務本部長：ゲームを面白くするコンテンツを作っているということだが、行政の様々な

政策と連携を進め、ゲームを通して文京区の観光名所を多くの方に見ていただくことができる。普通の行政ではできないことが、ゲームを通して進めることができるということになる。観光コースを設定することなども可能か。

プレゼン団体：街歩きのコースを柔軟に組み立てて、そこを皆で歩くということは容易にできる。また、例えばインGRESSには、「ミッションデイ」や「ファーストサタデイ」というイベントもある。これは、公式に企画されたお祭りになるが、公式イベントをいつか文京区で実施したいと考えている。以前、日比谷公園で実施されたときには、全国から5,000人が集まった。その5,000人が様々な方向へ歩いていくというイベントが実施された。いつか、文京区の東京ドーム周辺で、多くの方を集めてイベントを実施したい。

八木本部長：収益の点について、物品を販売した収入で継続して運営していこうと考えているのか。また、運営していく上で、他に新たな収益を考えていく必要があるのか。

プレゼン団体：ぶんきょういんぐれすは、低コストで運営している。他の団体と比較してもお金のかからないやり方をしている。

アマゾンのアフィリエイト収入で、サイトのサーバー代が賄える。さらに、定期的なイベントの物販などで利益が出ているので継続して運営していくことに問題はない。小さい金額ながら事業化は成立している。

八木本部長：あえて言えば、ぶんきょういんぐれすの課題は何か。

プレゼン団体：若い方たちの参加が非常に多いが、今後、もう少し歳が上の方に参加していただきたい。例えば、区内にある155町会でイベントができるようにしていきたい。そのためにも、町会長や町会の年長者の方には、若手育成の一つの手段として活用していただきたい。ただし、町会などと連携するためには、継続的に何度も説明して、理解をいただかないといけない。

福澤経済課長：地藏通り商店街と協力しているようであるが、お店にインGRESSの協力店という表示をしていると聞いている。商店街と協力してイベントを実施した後の反応はどうか。また、例えば他のエリアの商店街から反応があったのであれば教えていただきたい。

プレゼン団体：現在、地藏通り商店街では、数店舗がポスターを貼ってくれている。

ポスターには「Wellcome to Ingress AG」と書いてあり、「インGRESSプレイヤーを歓迎しています」とだけ書いている。見る方が見ればわかるので、将来的にはインGRESSをやっているお客様には50円引きとか、お互いの利益になるようなサービスを提供していきたい。音羽の商店街でも何店舗か話が進み、順次お願いしているところである。

<プレゼンテーション4>

プロジェクト名：「ようこそサカミチ in 文京 2023」(減災連携ステイクホルダーミーティングのモデル化とサカミチ観光開発事業)

団体：本郷いきぬき工房

<質疑>

熱田観光・国際担当課長：3月13日に開催したユニバーサル街歩きの参加者数はどのくらいか。

プレゼン団体：本来街歩きは、10人程度がベストと言われているが、30人定員で実施しようと考えていた。2月の時点ですぐに30人の定員が埋まってしまったので、公募ができなかった。しかし、ガイドの方から「もっと人を呼んでいいよ、俺たちも頑張るから。」とっていただけだったので追加募集を行い、最終的な参加者は45名になった。ものすごく需要が高く、参加者が多すぎてマネジメントができないくらいであった。特にユニバーサル系と建築系の街歩きのニーズが高かった。あと文京区観光協会が作っている街歩きコースの中には、復興エリアが入っていない。本郷一丁目周辺は、大正から昭和初期の貴重な建物がある。それがまだコース化されていないので、今までにない観光コースを提案させていただいた。そのコースのニーズも非常に高く、東京都の防災協会からも「一緒にやりましょう」と提案をいただいた。

熱田観光・国際担当課長：今は本郷エリアで事業を実施しているが、将来的には他のエリアでの事業実施も視野に入れているのか。

プレゼン団体：文京社会企業フェスタの時に、プレゼンをさせていただいた。その時に、播磨坂や小石川方面の坂道にすごく詳しい方がいて、「今度播磨坂でやろう。」とか、「この坂道でやりたい。」と提案された。「それでは、次回はそこでやりましょう。」という流れができつつある。

熱田観光・国際担当課長：確かに本郷のエリアは坂道も多いし、歴史的な文化も豊富な一大エリアである。しかし、それ以外にも文京区には坂道がたくさんあるので、本郷での実績を踏まえて、他のエリアにも拡大していただきたい。

プレゼン団体：司馬遼太郎の「坂の上の雲」のモデルとなった坂が文京区の本郷にあるので、その坂を拠点とした地域共助としての観光発信ができたらと考える。逆に小石川方面で、いい拠点となるようなところがあれば教えていただきたい。

各務本部長：先程、防災・観光・ユニバーサルに坂の駅というコンセプトで、興味深く拝聴した。一方で、ぶんきょういんぐれすのときも話が出たが、例えばぶんきょういんぐれすと連携して、こういった考え方をゲーム性の中で見出して行くとか、連携して何かできるのではないかと思うが。

プレゼン団体：「ぶんきょういんぐれすと組めるといいね」と周りの方によく言われるが、私自身ITが苦手なので、今はまだ組めないと思う。逆に、今回サポートいただいた東京大学の三浦先生にアドバイスをいただいたのは、「防災で何かやりますといっても人は集まらない。しかし、IT講座スマートフォン入門講座にすると高齢者の方々が参加しやすくなる。」という話があった。三浦先生は、他の都市で、スマートフォン入門講座でスマホの使い方を教えながら実際に街歩きをして、知らず知らずのうちに防災のことも教えるような取組をやっている。ぶんきょういんぐれすと組むということは、IT

弱者であるかどうか IT のリテラシーがあるかどうかというところが一つの鍵になると思う。それが一つ乗り越えられたら、一緒にやっても面白くなると思う。

また、今回事業を実施してみて、防災が好きな方とユニバーサルが好きな方と観光が好きな方を無理やり一緒にしたら、最初は全然コミュニケーションが取れなかった。しかし、少しずつ仲良くなっていった。

あと、坂の駅のことをパワーポイントに書き忘れていたが、一番面白かったのは、斜面の角度を測るというアクティビティを入れたこと。そうすると、ここは斜度が5%だとか8%だとか、本郷には急な坂が多いだとか、今日の記録は13%だったとか、様々な気づきがあった。電動車椅子で登れる斜度は5%程度であり、実際には8%、10%と電動車椅子がひっくり返りそうな坂が本郷には多いことに気づいた。今後、東京大学の先生方と一緒に、斜度が入った地図を作っていこうという話もある。その辺のイベントの内容もぶんきょういんぐれすととは特徴が違うと思う。

各務本部長：例えば、今の斜度のような話から、区に対する一つの示唆というようなことがでてくる。場合によっては、そういうことを我々も含め区民と共有して、必要に応じて修正するという示唆もある。防災にとって、何かあったときにアクションを伴う示唆についてはどのようなものがあるのか。

プレゼン団体：まず、助けたいと思っている方たちは、車椅子の方をどう助けたいのかかわからない。助けたいと思っても手が出せないという方が多い。防災館などでは、6人一組になって担架を運ぶ練習などができる。今回の場合、街歩きをしながら自然に6人一組になって車椅子を担ぐ体験ができる。そうするとアクティビティとして楽しみながら体験ができる。参加者から「これは本当に楽しいエンターテイメントだね」と言っていたら、防災という言葉を書かないし言わなくても、防災に対する学習ができる。逆に障害者の方々は、「明日首都直下型地震が起こるよ。これだけの人が死にますよ。」と話をすると、生き辛さを助長してしまう。それが最大のリスクであり、今回この事業が生まれたきっかけでもある。防災の話は、身体障害者の方や精神障害者の方にしにくく、考えるだけで辛くさせてしまう。楽しいアクティビティを通して、体を使って覚えてもらい、最終的には障害者ご自身が助けを求めたり、担がれる事に慣れていただかなければいけない。ご本人たちの自助力を高めてもらう効果もあると感じている。私の車椅子の友人も、首都直下型地震や東日本大震災の後に、生き辛さを抱えてしまい家に引きこもってしまった。私のお願いならと過去に実施したイベントに参加してくれて、根津神社にご案内したときに、「ものすごく楽しいからまた来たい。」と言ってくれた。それから防災の非常食を備えたりするようになった。今回開催した「ユニバーサルまちあるき」では、「私が何か教える、講師は私がやる。」と仰ってくださるようになった。楽しい場を作ることで、確実に心の変化を育てることができる場になっている。

菊地本部長：本郷いきぬき工房の取組みや組織がわかりやすくなった。ぶんきょういんぐれすとコラボできる可能性も感じる。なお、海外で話題に取り上げられたとのことだが、

コミュニティーレジリエンスというが、これから事業を展開していく上で、どのように資金を得ていくのか、今の事業量をこなすためには、組織を強化する必要もあると考えるが、インターンを受け入れるなどの考えはあるのか。

プレゼン団体：私は、もともと国際協力がバックグラウンドで、このやり方も一応アジアとアフリカのコミュニティ・デベロップメントのスキル手法で事業を実施した。思った以上に盛り上がり、地域の方や学生の参加も促せた。

また、法人化については、前回の継続審査で安藤先生から話をいただき検討したが、団体内からいろいろと反対を受けており、全然進展していない。今年度に支援いただき、私は防災コミュニティを楽しく作ることが得意らしいということがわかった。今後、仮称「いきぬき文化研究会」を立ち上げ、マインドフルネスやヨガ瞑想など、安心する技術を取り入れながら、研究会として始めようと考えている。

また、インターンについては、東京大学の大学院生がボランティアとしてサポートしてくれたおかげで、本当にやりたかったことを見つめ直すことができた。

今回のプロジェクト支援では、坂道で障害者のユニバーサルと防災について事業を実施させていただいた。一方で、社会福祉協議会の助成金による障害者の防災をみんなで考える「ユニバーサルな避難所をみんなで作ろう」というコミュニティ作りを行った。

障害者の避難所を考えるチームと、坂道チームの両輪を回していることが、日本の中でも希少な事例であり、今後も事業を継続していく予定でいる。

安藤本部員：発展の様子が、私のイメージとすごくリンクしている。区民にとっては、坂の駅構想がどんどん進んでいくといい。文京区発で日本中にアピールできる素晴らしいソーシャルイノベーションになる。最近、防災に対する意識も高まっているので、区としても、文京区のモデルとして発信してほしい。読売新聞にも掲載されているし、私自身もメディアに発信していきたい。事業化に関しては、NPO法人でも一般法人でも可能性はあると思う。協力者や寄付を集めて、しっかりと事業基盤を築いていただきたい。陰ながら応援して行こうと思っているので、頑張ってください。

プレゼン団体：うれしいお話ありがとうございます。

八木本部長：人をつなげるのが上手で、様々な方々がどんどん集まってくるような印象を受ける。ネーミングも面白い。坂の駅、駅長という発想がいい。それと人が来やすい雰囲気作りもいい。防災に力を入れていると思うが、防災オンリーでやると各所から「防災はもういいよ。」と言われることもある。防災を取り入れながら、違う楽しみもあるからやろうという方法は行政としても考えさせられる。様々なことを多目的に考えるという一つのいい事例である。事業化に関しては、一緒に考えさせていただけたら思っている。

プレゼン団体：貴重な機会をありがたく感じている。

4 プロジェクトの審査について

選考委員の合議により、文京かるた隊、ぶんきょう・いんぐれす、本郷いきぬき工房の支援終了を決定した。

5 平成 27 年度 新たな公共プロジェクト実施状況について

阿部協働推進担当課長：【資料第 7 号】平成 27 年度新たな公共プロジェクト実施状況報告書（案）に基づき説明。

6 平成 28 年度 新たな公共プロジェクト実施スケジュール（案）について

阿部協働推進担当課長：【資料第 8 号】平成 28 年度 新たな公共プロジェクト実施スケジュール（案）に基づき説明。

7 新たな公共プロジェクト成果検証会議の開催状況について

阿部協働推進担当課長：【資料第 9 号】新たな公共プロジェクト成果検証会議の開催状況に基づき説明。

8 その他

阿部協働推進担当課長：本プロジェクトの円滑な運営のため、平成 25 年度から設置してきた担い手創出プロジェクト支援本部は、本年度末をもって終了となる。

また、新たな公共プロジェクトの所管は、平成 28 年 4 月 1 日付の組織改正に伴い、協働推進担当課長が廃止になるため、区民課長が後任となる。

八木本部長：これまで、本部員の皆様には、貴重な助言等により支援をいただき感謝している。区の職員として、硬直した考え方ではなく、柔軟な発想で区民の方と歩みを共にしていくことを考えながら仕事をしていく。新たな公共プロジェクトでは、男性や若い方の参加も多く、対話の場への参加者も増加している。直ぐに結論が出ることではないが、着実に歩み始めている。この歩みを止めないよう、さらに加速し深くなるように新年度以降も事業を進めていく。また、是非、今後の取り組みを見ていただき、ご助言等いただければありがたい。

9 閉会